

## 11. 雲津の日蓮宗—檀家からみた地域の仏教

西 本 陽 一

1. はじめに
2. 雲津の日蓮宗
3. おわりに

### 1. はじめに

調査報告書では通常、対象地区にはどういう宗派の何というお寺があるか、それらのお寺の由緒はどんなものかが紹介されるのが普通である。しかし、今回金沢大学文化人類学研究室が対象とした珠洲市三崎地区の旧小泊小学校校下の高波、伏見、小泊、雲津地区にはお寺がない。神社と氏子との関係とは異なり、寺院の檀家の範囲は、自然集落あるいは行政的な単位とは一致しないことは、これまでの調査実習でも明らかになっていたことであるが、私が参加したここ数年の調査実習では、対象地域に寺院がひとつも存在しないことはなかった。それらの寺院の檀家の範囲は、集落の範囲とは一致しなかったものの、子供向けの仏教教室や青年あるいは婦人仏教会などの組織活動によって、町内の活動と同様の働きを少なくとも一部有していた。これに対して、今回対象とした小泊校下では、地域内に寺院がなく、地域内の全世帯が地域外の寺院を檀那寺としているために、寺院と住民との関係は町内会とは関係をもたず、寺院と檀家世帯との関係となっているのである。

以上の状況をかんがみて本章では、地域と仏教寺院との関係を考察するのではなく、地域外にある仏教寺院と地域の一世帯との関係を検討したい。それは地域における仏教寺院の位置や活動を網羅的に報告するよりも、寺院の在家組織の長を務める一住民への聞き取りから、正統な仏教のあり方はどうであれ、住民が仏教とどのように付き合っているかを考えてみたいと思う。

以下での報告は、雲津のTさん（男性、62歳）からの聞き取りに基づいている。よって、以下の文章で括弧付きの部分は、特に注を加えていなければ、Tさんの言葉である。Tさんは高校卒業後に銀行に就職し、珠洲の支店で四年間勤務した後に、七尾、金沢、輪島などの支店に勤め、50歳代になってから再び珠洲に戻ってこられた。2009年3月に銀行を定年退職され、翌4月から檀

那寺の在家組織の長をされている。33-34 歳と 29 歳の娘さんと息子さんがいるが、いずれも独身で金沢に暮らしている。雲津の自宅は、3-4 年前に新築した新しい家で、玄関を入ると吹き抜けがあり、伝統的な味わいとモダンな作りを組み合わせたものである。そこに 88 歳になる T さんのお母さんと、奥さん（60 歳）と三人暮らしをなさっている。お話は、玄関を上がって右手の床の間にてうかがった。床の間の奥には、仏壇のある仏間がある。長く銀行勤めをされていた T さんは、眼鏡をかけて知的な風貌をし、論理だって分かりやすくお話してくださったが（2009 年 8 月 5 日）、お話は同時にやさしい打ち解けた調子でもあった。

## 2. 雲津の日蓮宗檀家

### 2.1 妙珠寺の檀家組織

雲津にはいろいろな宗派があるが、もっとも檀家が多いのは浄土真宗だという。曾祖母の時代に分家して「シntax」（新宅）となった T 家は、本家とともに代々日蓮宗の檀家で、檀那寺は野々江にある妙珠寺である。T さんによれば、雲津地区には日蓮宗檀家の家が 7 軒ある（住民票によれば 2009 年 5 月末時点で雲津地区には 90 世帯が暮らしている）。日蓮宗の本山は山梨県の身延山にある久遠寺であるが、石川県については「羽咋より向こうと羽咋よりこっちで」、第一と第二のふたつの「ブロック」に分かれている<sup>1</sup>。

妙珠寺（石川県珠洲市野々江町）は、宝立に 7-8 軒、上戸に 12-13 軒、飯田に 24-25 軒、直に 7-8 軒、雲津に 7 軒で、合計 67-68 軒の檀家を持っている。『珠洲市史』によれば、妙珠寺の前身は真言寺院の極楽寺であったが、廃頽していた極楽寺跡に日蓮宗妙玉寺として開創されたと考えられる（珠洲市史編さん専門委員会編 1978：427-428）。妙珠寺の近くには、本住寺というもうひとつの日蓮宗寺院がある（石川県珠洲市正院町正院）。

T さんは今年（2009 年）3 月に長年勤めた銀行を退職し、4 月より「妙珠寺護持会」の会長となった<sup>2</sup>。妙珠寺の檀家組織には、この「護持会」と「総代会」とがある。

「護持会」の役員には、会長（1 人）、常任幹事（1 人）、会計（1 人）、監査役（2 人）、地区幹事（8 人；鶴飼 1 人、上戸 2 人、飯田 3 人、直 1 人、雲津 1 人）がいる。いずれも任期は 3 年だが、実際にはひとりが何年にもわたって務めることも多いという。T さんの前の会長も、長年務めた人だった。

「総代会」は、檀家のいる五地区からの代表 5 名で構成される。T さんによれば、「総代会」は檀家の最高意思決定機関であり、本山に送る書類は、住職と総代会の連名で出されるという。

能登の日蓮宗寺院には、寺はあっても住職がなく、別寺の住職が兼任しているところもある。妙珠寺には、正院にある本住寺と合併してしまおうかという話もあった。檀家の間では、数年前

にせつかく「クリテ」（庫裡、僧侶の居所のこと）を建てたのにもったいないなどという話もあった。

妙珠寺は、昨年（2008年）に住職が交代した。前代の住職は年齢も90歳代と高齢で、新しい住職を探すことが問題になっていた。前代の住職には息子がいるが、この息子（66歳位）は「若いころには外に出ていて、あちこち回っていた人で」、この息子を次の住職とするか、また他から人を探すかで、妙珠寺の檀家は何年も話し合っていた。しかし、結局昨年に前代の住職からこの息子へと、住職職が引き継がれた。

長年銀行勤めをされた後で檀家組織の長となつたばかりのTさんは、寺院の経営方式について、「お寺は普通の会社とは違う」と、驚きに似た印象を述べられた。お寺は、地区の檀家が全て面倒を見なければならない。庫裡やお寺の修理や建て直し、住職の光景の話も全て「檀家もち」である。「本山、会社で言うところの本社、は何もしない」。お寺のやり方は、一般の会社のやり方とはだいぶ違う。一方で檀家は、本山と能登ブロックへの「上納金」（正確になんと呼ぶのか知らないが、とTさんは言った）も檀家が払わなければならない、と。

妙珠寺へ、本山の「偉い人」が時々見に来ることがある。前住職の時は、高齢で自分で出来なかったために、本山からの訪問に先立って住職は檀家に寺の掃除などを頼んでいた。今の住職は、檀家に頼まずに自分でやるという。

## 2.2 寺院でおこなわれる行事

妙珠寺で行なわれる代表的な年中行事として、Tさんは「涅槃の団子まき」（3月15日）と「オミコト」（10月13日）を挙げられた。

「涅槃の団子まき」の日には、檀家の人々はお寺にお参りする。寺の役員が団子を撒くと、檀家の人々が拾う。団子はお釈迦様の教えを表し、団子を拾うことはお釈迦様の教えを拾うという意味があるそうだとTさんは説明して下さった。

「オミオコ」と当地で通常呼ばれているものは、正式には「御命お講」という。詳しくは知らないが、親鸞聖人関係の行事だとTさんはおっしゃった<sup>3</sup>。檀家の人々は寺にお参りし、一緒に食事し、説法を聞く。

これらの他に、親鸞聖人の命日か何かの日に大きな行事があるが、不定期に行なわれているとのことであった。

「オオホトコ」と通称される行事については、Tさんは「五年に一度おこなわれる大きな行事」という捉え方をされていた。「オオホトコ」の正式名称は「輪番大宝塔講」で、「奥能登ブロックの五ヶ寺」の持ち回りで行なわれるものである。このために、妙珠寺から見ると、五年に一度、番が回ってくる行事である。

オオホトコは、朝から一日おこなわれる。五ヶ寺の住職が集まり、「チギョウ」（稚児）の行列が出る。羽咋の妙成寺（みょうせいじ、ブロックの中心寺で五重塔が有名）のお坊さんも来て、他の主だったお坊さんも来る大掛かりな行事である。食事と一緒に摂るが、お坊さんはお坊さん同士で、檀家は檀家同士で摂る。

チギョウの行列では、子供たちが派手でカラフルな着物を着る。行列には子供が30-40人必要だが、地区には子供の数が少ないので、檀家以外の家にも頼んで子供を出してもらう。そういう意味で、オオホトコは単なる仏教寺院の行事という意味を越えて、地域のイベントという意味をも担っていると言えるだろう。子供の着る着物は寺によって用意されているのではなく、檀家が自分で買うものである。檀家の代表の家が行列の出発点となるが、檀家の代表となると、「結構お金がかかる」という。行列に出る子供は、「保育園、幼稚園、小学低学年ぐらいまで」だが、母親に抱かれてほんの小さな子供が出ることもある。

## 2.3 檀家宅でおこなわれる行事

### 2.3.1 月例のお勤め

T家では、日々のお勤めは90歳近くになるTさんの母がやっている。「ご先祖」の亡くなった日が7月5日なら毎月5日に、仏壇に「ブッシュウ」（「仏」と何かと書くが、二字目の漢字は分からない、とにかく「ご馳走」という意味だとTさんは述べられた<sup>4)</sup>、つまり小さな「ご膳」にご飯、お汁、野菜ものを載せて、朝仏壇に供えて、お経をあげる。お経は詳しいものではなく、知っているだけのところをあげているそうである。

T家には「ご先祖が三人」いる。Tさんの「じいちゃん、ばあちゃん、親父」である。「じいちゃん」は4日に亡くなり、「親父」は6日に亡くなったので、毎月4日と6日にお勤めをしている。こう説明してきたところでTさんは「ありゃ、男だけだ」と、自分でも驚いたように述べられた。「ご先祖」三人に対してお勤めをしていると思っていたのだが、実際には、お勤めするのは男性の先祖に対してのみだと気づかれたのである。

「ご先祖」の月命日のお勤めのほかに、何日かは分からないが、毎月、日蓮聖人の命日に「(Tさんの母が)何かをやっている」。やっていることは、「ご先祖」の月命日にやることと同じで、仏壇にご膳を供えて、お経を読むことである。

これらのお勤めの際には、昔は線香と蝋燭とを点したが、今では線香は小さなものを使い、蝋燭の代わりに「電気の蝋燭」（電灯）を用いているという。小さな線香を使うのは、お経を読んでいる間に燃え終わるぐらいのものをういたいということからで、お勤めが終わった後に線香を燃えたままにしておいて、火事などにならないようにするためである。

Tさんは、今は「おばあちゃん」（Tさんの母）が、日々のお勤めでお経を呼んでいるが、自分

もこれからは少しお経も勉強して、読めるようになれば、とおっしゃった。

### 23.2 お盆

お盆は8月半ばにおこなわれる。8月10日より「お上人」(妙珠寺の住職)が檀家の各家を回って、30分ぐらいずつお経をあげてゆく。2009年はT家には8月10日午前中に、住職がやってくるようになっていた。8月13日から16日までの間は、いつもはお墓にいる「ご先祖」が自宅に帰ってくる期間とTさんは考えている。

8月10日頃に檀那寺の住職が家に来られるときには、床の間に低い台を置いて、果物や団子などの供え物を置く。床の間には普段は掛け軸が掛けられているが、この日はそれを住職が持ってくる「マンダラ様」に替える。

「マンダラ様とは、漢字ではどう書くのだろう、ちょっと分かりません」とTさんはおっしゃった。とにかく、「マンダラ様」には、日蓮聖人を初め、偉い仏さんたちがたくさん書かれているのだという。

檀那寺から来た住職は、仏壇でも少しお経を唱えるが、主に床の間を前にして、つまり「マンダラ様」の前でお経を読む。これについてのTさんの説明は次のようなものである。仏壇には、ご先祖と日蓮さまのみしかいらっしゃらないが、「マンダラ様」には、日蓮聖人を含めて、偉い仏様がたくさんいらっしゃる。「マンダラ様」を拝むことは、これら偉い仏様を拝むことで、キリスト教に譬えて言えば、イエス・キリストが一番偉く、その一番偉いイエス・キリストにお参りするようなものである。Tさんのこの説明からは、日蓮宗は日蓮聖人が創始者であるが、仏教という文脈では他にももっと偉い仏様がいらっしゃり、その仏様を拝むために、床の間に掛けられた「マンダラ様」の前でお勤めがなされるという考えが見られる。

お勤めが終わると、床の間の台の上に置かれた、果物、団子、水、米のお供え物のうち、果物と米とは住職がもって帰る。

8月13日の午前中には、家族でお墓に行って、お墓に入っておられるご先祖に、どうぞお盆ですので自宅へお帰りくださいと言う。「私たちがご先祖を(家まで)乗せてきて」、仏壇に来てまたお参りする。現在では車で墓まで行くので、車にご先祖を乗せて帰ってくるということであろう。妙珠寺にあるお墓まで行く道は、大通りを通ってゆき、帰りにも大通りを通って帰ってきて(そうすることになっている)、ご先祖に自宅でくつろいでもらうという。

8月13日にお墓に参る際には、墓を洗い、水を供える。昔は瓜や果物も供えたが、今では供えても後で持ち帰るか、食物は供えずに水だけを供える。後のごみの始末が大変だからである。お墓では線香と蝋燭を焚く。昔は焚いた線香と蝋燭とをそのままにして帰ってきたが、今は火事の心配もあるので、消して帰る。

家の仏壇には、仏壇の中と前とに、果物、白玉団子、お花を供える。8月13日から16日の間は、Tさんの母が毎日朝と晩とに仏壇にお参りする。この間、ナスやキュウリで牛馬の人形を作ったりはしない。

8月16日には、昼から夕方までの間に「ご先祖」を送る。「ご先祖」にお墓に帰ってもらうのである。Tさん夫婦とTさんの母の三人で再び墓へ行き、花を替え、線香と蠟燭とを点す。このとき一般にお墓の前で「来年までお墓でどうぞ寛いでください」などと唱えるべきだそうだが、「私は言いませんが」とTさんは付け加えた。

お盆の説明をしながら、Tさんは突然『千の風になって』という歌があるでしょうとおっしゃった。「千の風になって」は数年前にヒットした歌で、死んだ私はそこにはいませんので、お墓の前で泣かないでくださいと歌っている。『千の風』という歌がありますでしょう。私の魂はお墓にはいませんというやつ。そう言ってますが、考えるとおかしいですね。(8月)13日に私たちはお墓に行って、ご先祖を家まで乗せてくると言います。その後ご先祖はお墓にはおらず家の仏壇にいる訳ですが、他の親戚たちもその後でお墓にいてお参ります。でも、私たちの行った後だと、ご先祖はそこにおらず、お墓は空っぽなわけです。空っぽなところにお参りしている。考えてみるとおかしいことです。

### 2.3.3 トキハジメ

お盆の際に住職が家に来て、仏壇ではなく、床の間の前で主に読経するという話をしていて、Tさんは、「そういえばもうひとつ(年中行事が)ある」と思い出されたように言われた。

新年の、一月中旬から二月初め頃には「トキハジメ」という行事があり、「お上人さん」(檀那寺の住職)が家に来る。床の間に台を置いて、たくさんお供え物をする。食物(米、お菓子などたくさん供えるが、魚肉類はなし)とお酒を供えて、お勤めの後で、「お上人さん」に持って帰ってもらう。

「お上人さん」は、雲津班の檀家7軒を一日で回る。朝7時半頃から12時ごろまでで7軒を回る。「班」(地区)の家を回る日程は、「宿番」に当たった人が決めるが、最後は「宿番」の家になっていて、「お上人さん」は最後の「宿番」の家でお昼ご飯をいただく。「お上人さん」の食事には、魚肉類を出してもよいし、お酒も出してよい。もっとも現在の妙珠寺の住職は自動車を運転してくるので、お酒を出すことはしない。前住職は車の運転免許を持っていなかったので、当番の人が迎えに行っていた。お酒も少し出していた。

Tさんはなぜこの行事を「トキハジメ」と呼ぶのかその理由は知らないとおっしゃった<sup>5</sup>。

### 3. おわりに

雲津の日蓮宗の一檀家である T さんが語る仏教についての話は、教団や僧侶が語るより公的な話とは異なり、教義がどうであれ、仏教が地域でどのように実践され、考えられているかについて、多くのことを教えてくれる。

一方、長年銀行勤めをされ、4 ヶ月前からは旦那寺の檀家組織の長をされている T さんは、仏教行事を単に慣習的にやってゆくものとして捉えるのではなく、その意味や意味の矛盾について時おり客観的な視点から反省のまなざしを投げられている。

同氏が語る地域仏教のあり方についての話は、慣習化され行事化されふだんは反省的な目が向けられない仏教行事と、一方でそれに向けられるより反省的な目というふたつの志向があらわれている。

#### 注

<sup>1</sup> 日蓮宗ポータルサイト ([http://www.nichiren.or.jp/appearance/kyoku\\_syumujyo.html](http://www.nichiren.or.jp/appearance/kyoku_syumujyo.html)) によれば、日本全国は11の教区と74の管区に分けられている。Tさんが「ブロック」と呼んだのは、この「管区」のことである。また『日蓮宗寺院大鑑』(1981)には「石川県一部」と「石川県二部」と書かれている。

<sup>2</sup> 「会則」については、資料「妙珠寺護持会規約」を参照のこと。

<sup>3</sup> 日蓮宗ポータルサイト (<http://www.nichiren.or.jp/nichirentoha/syumonseijitsu.html#09>) によれば、10月13日は日蓮聖人が亡くなった日で、「宗祖御会式(しゅうそおえしき)」という年中行事が行なわれる日である。

<sup>4</sup> 実際には「仏餉」と書くと思われる。

<sup>5</sup> 仏教法会の食事を「斎」と言うので、「斎始め」と書くのかもしれない。